元気っ子　Ｎｏ342 ながさわ保育園

園　長　　中　瀬　弦　偉

「子どもは遊びが仕事」という言葉をよく耳にしますが、子どもがトコトン夢中になって遊びこむことは子どもの心身の成長発達を促すからだと思っています。

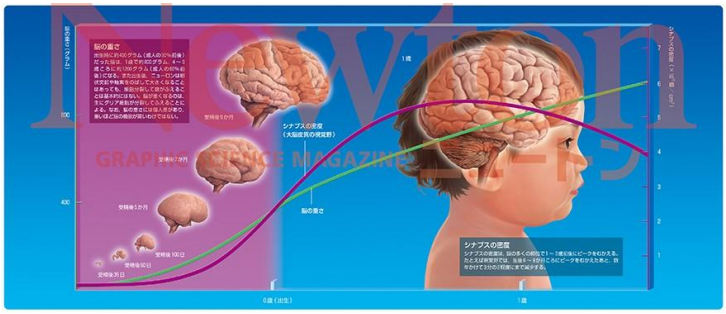
乳幼児教育施設は、フリードリヒ・フレーベル（ドイツ・幼児教育の祖）が「kindergarten（子どもの園）」として日本に持ち込んだのですが、日本では、子どもは未熟な存在であるとの認識から「kinder」を「幼稚」と訳した結果、日本の乳幼児教育は小学校に入学する前段階の幼稚な存在である子どもに「教え込む場所」として日本の「幼稚園」が定着していきました。しかし、フレーベルが考えていた「子ども（kinder）」は、内に宿る神性を信じ、子どもには独自のニーズと能力がある（有能）という認識でした。つまり有能である子どもからその能力を引き出すことを目指したものが「kindergarten（子どもの園）」なのです。そしてその能力を引き出すことは 100％「遊びを通して」ということが世界的なスタンダードになっています。（子どもの脳の「白紙論」は現在、世界のほとんどの国で否定されています）

例えば、お隣の韓国では国の施策として、「ヌリ課程」という子どもの遊びを中心とした乳幼児教育が行われています。そしてこれは日本の保育所保育指針にもあるように「環境を通す」また、「遊びを中心とした」ということが徹底されており、施設監査で指摘を受けて改善がなければ補助金が施設に入らないそうです。

日本もそういった「保育内容」にきちんと監査を行っていく専門機関が必要かもしれません。

このように欧米はもちろん、シンガポールや中国、韓国などアジア諸国でも「環境を通した遊び中心の乳幼児教育」がスタンダードになっています。このまま、旧態依然とした乳幼児教育からの脱却を模索しなければ、やがてこの分野で世界から取り残されるのは日本と（謎のベールに包まれている）北朝鮮くらいになってしまうのではと危機感をもっています。

子どもの脳の発達について、最近は科学や医学が著しく発展しながら、この分野についても世界中で様々な研究や発表があります。その中でも脳の神経細胞の研究では、乳児はあらかじめ神経細胞と神経細胞をつなぐシナプスを多くもっており、成長過程でそのシナプスを上手に刈り込んで（減らして）、最適な神経回路を形成していきます。そしてこのシナプスの刈り込みは子どもが 1 歳になる前から始まっています。また逆にこのシナプスを上手に刈り込めないと、神経回路に不具合が生じ、いわゆる「ギフテッド（発達障害）」になることが分かっています。最近ではこのシナプスの刈り込みがうまくいかなくなる主な要因として、「親の過干渉」と「過度の早期教育」が挙げられていますが、これを減らしていくためには、施設利用の要件緩和など、国の施策改善が必要かもしれません。



乳幼児施設の重要な役割はこのように、「遊びを中心とした環境を通す」ことや「乳児期からのシナプスの刈り込み」が中心になることが広く認知され、親の就労のための施設ではなく、子どもの成長発達に必要不可欠な施設としての認識が広がることを願っています。